「龍の瞳」で森再生

来年2月にもNPO発足

「日本一おいしい米」

「日本一おいしい米」の称号を2年連続で得た「龍の瞳」を、中山間地の活性化と本格的な森づくりに役立てようと、新しいNPO（特定非営利活動法人）「龍の瞳倶楽部」が、早ければ来年2月にも発足する。今月14日には設立準備の総会が下呂市で開かれ、新たなブランド米を生かした地域おこしへの夢や希望が語られた。（中沢一議）

設立準備を進めているのは、「龍の瞳」の種（品種名・いのちの壱）を00年9月に発見した下呂市の今井隆さん(53)。今井さんは合資会社を設立して種を育成。栽培契約を結ぶ農家・団体を県内外で増やしてきた。契約相手の一つで高山市の「まんま農場」が日本一の称号を得た。

今井さんは、丈夫な品種であることも生かし、低農薬・無農薬を、栽培を認める契約条件にしてきた。同時に「究極の米作り」をキャッチフレーズに田植えや稲刈りを体験してもらうなど、都市住民を招いた交流も行ってきた。

また、ブランド米として高値の販売価格を維持することで、収益性では不利な中山間地の棚田でも、一定の収入が確保できる努力も重ねてきた。実際に、下呂市内に限った耕作放棄地も年に1㌶規模で復元されているという。

新しいNPOは、合資会社「龍の瞳」の収益を活動のための基本原資にして、公益性の高い活動をめざしたいと、今井さんが構想してきた。

将来目標に掲げるのは、中山間地の森の再生だ。「川や海を今より澄んだ水に変えていけるような森として復元したい」と今井さん。龍の瞳の栽培を軸に、地域の自然にあった森づくりを考えている。

「米作りに大切なのは水。養分に富んだ水を棚田に引いてくるためにも、山に木を再生させることが不可欠になる。稲作体験と森林づくりで都市と農村の交流もはかりながら、観光にも生かしたい」

発起人の一人で下呂市の曽我康弘さん(50)は、農業生産法人の代表として耕作放棄が進む現実を目のあたりにするとともに、龍の瞳で復元された田んぼも見てきた。NPOの理事に就任を予定しており、「何もしなければ山間地の棚田は作付けされなくなり荒れるだけ。歯止めをかけられるのが龍の瞳だと思っている」と準備会の席で話した。

設立準備会で思いを語る今井隆さん＝14日、下呂市萩原町上呂

準備会には愛知県春日井市で無農薬の米作りを30年続けてきた男性も参加。「無農薬だから田んぼをはいずり回って草をとっている。龍の瞳の種をいただけてその思いを強くしているし、子どもたちにも継がせようと思っている」と話していた。

NPO設立のための申請を近く県に提出。2カ月ほどの審査を経て認可が下りる。

岐阜

美術品
高価買受
（秘密厳守）
版画 絵画
掛軸 陶器
無料鑑定 出張いたします
岐阜市本荘中ノ町10丁目37-3
（県美術館東へ200m）
売るのも買うのも
ギャラリー 栄雲。
株式会社 光陽社
0120 0120
イーヨ コーヨーシャ
14-5448